

ロゼッタストーン

ロンドンにある大英博物館を訪れると、入り口を入ってすぐにグレートコートと呼ばれる大空間に出る。そこを通り抜けて古代エジプトの展示コーナーに入ると、ロゼッタストーンを見つけることができる。この有名な展示物は、1799年、ナポレオン・ボナパルトがエジプトへ出征した際、港湾都市ロゼッタで発見したものである。

高さ114cm、幅72cm、厚さ28cm、重さ約762kgのいびつな形をしたこの重厚な岩には、ギリシャ語と古代エジプト語の2種類の言語が刻まれている。古代エジプト語については、公式の絵文字であるヒエログリフと、それを簡略化した草書体のデモティックの、2種類の象形文字が使われている。

判読可能なギリシャ語と、2種類の象形文字による古代エジプト語は、それぞれ、同じ内容を記述していると推測された。そして実際、トーマス・ヤング（英）とジャン・フランソワ・シャンポリオン（仏）がロゼッタストーンの解読に成功すると、その結果を手がかりに、他の古代文字文書が続々と解読されることとなったのである。

古代文書の解読という難問を解き明かす「重要な鍵」となったロゼッタストーンは、フランス軍が要塞の拡張工事を進めている際、取り壊された土壁の中に埋もれていたところを発見されたと言われている。このときフランス軍の工兵がその重要性に気付かなければ、ただの「石」として処分されていたか

もしれない。

かくして、単に土壁に埋もれていただけの石が、単なる遺跡の一部とは異なる大きな意味をもつものとして、博物館のガラスケースの中で、後世の人々の注目を集めることとなったのである。

このように、ある人達にとってあまり意味がないと思われるものが、別の人達にとって貴重な情報源となることがある。ハッカー（天才プログラマー）やクラッカー（コンピュータ犯罪者）は、ある人達にとってあまり意味がないと思われるものを集め、そこから価値あるものを探し出すということを、その手段として使っているのである。

この技法は「ソーシャルエンジニアリング」と呼ばれる。これは一種の詐欺であり、システムに対する攻撃の代わりに、人間に対して攻撃（詐欺）を仕掛けるものである。つまり、暗号化された情報でも、最終的にはそれを利用できる人がいる。システムに侵入して暗号解読をする代わりに、その人から何とか情報を引き出そうという考え方である。

たとえば、あるシステムの初期パスワードに利用者の誕生日が使われているとわかれれば、利用者の一人から誕生日を聞き出し、パスワードを忘れたので初期化してほしいとヘルプデスクに依頼し、システムに入りこんで悪さをすることが可能となる。さりげない会話のなかで誕生日を聞かれ、これに答えたこ



とが、企業のシステムに侵入されるリスクをもたらすことになるとは、必ずしも考えないことであろう。

この場合、本人にとって誕生日は「重要な鍵」ではなく「石」に近い。技術的には、パスワードによる保護や、データの暗号化を施しているかもしれないが、正規の利用者としてシステムに入ってしまうと、その時点でこれらの対策は意味をなさなくなってしまう。

これはコンピュータシステムでは防ぎにくい「人間」という弱点を突くものである。こうした「ソーシャルエンジニアリング」の手法について、史上最強のハッカーと言われるケビン・ミトニックは、著書『The Art of Deception』（邦訳：『欺術（ぎじゅつ）』ソフトバンクパブリッシング刊）の中で、「ソーシャルエンジニアリングで崩せないものはない」とまで言い切っている。

金融機関などを装った偽の電子メールで利用者に近づき、IDやパスワードなどの重要情報を引き出そうとする「フィッシング」や、社会的に話題となっている「振り込め詐欺」は、まさに人間という弱点を狙った悪質なソーシャルエンジニアリングである。

それでは、このようなソーシャルエンジニアリングに対して、いくら技術的な対策を打っても無駄かということではない。うっかりミス、紛失などの事故や、ちょっとした出来心で攻撃してくる輩（やから）に対して、技

術的な対策は有効である。しかし、技術的な対策に加えて、人的対策、つまりマネジメント面の対策を加えなければ片手落ちということである。

情報漏洩は、バケツの一番低いところに空いた穴から漏れる水によくたとえられる。たとえ技術的対策によって、ある部分をいくら高くしても、それより低いところに穴が存在する限り水は漏れ出る。

もちろん、技術的対策と人的対策の穴の高さの相対関係はケースによって変わる。しかし、一般的には完全でない「人間」が、バケツの一番低いところに空いた穴（弱点）として残るのである。

一度は忘れ去られ、埋もれてしまったロゼッタストーンは、再び「人間」によって発見されることで、当初の目的とは異なる形で新たな価値をもたらした。

埋もれている何でもない「石」を貴重な「情報」に変え、価値を見つけ出すのは、ハッカーの専売特許ではない。「石」から、新たな事業を創造したり、新たな価値を創造するのも、「人間」のなせるわざである。

セキュリティ面で弱点となる「人間」だが、創造面では「重要な鍵」である。また、どのように情報を取り扱うべきかを決めるのも「人間」である。そう考えると、企業や組織におけるロゼッタストーンは、やはり「人間」ということになるだろう。 ■